

歴史民俗資料館特別展

屏風祭

—池田の文化をひらく— **最終回**

歴史民俗資料館では、12月4日(日)まで、「屏風」をテーマに池田の文化を振り返る特別展を開催しています。11月号では、近世の屏風から呉春《老松小禽図》、松村景文《花鳥図屏風》をご紹介します。

四条派の祖・呉春

絵師の松村月溪(1752~1811)は、京都に生まれ、与謝蕪村(1716~84)に俳諧と画を学びました。天明元年(1781)、妻と父を相次いで亡くした彼は、池田に移り住み、剃髪して名を「呉春」と改めます。

池田には蕪村門人で呉服商であった川田田福の店(井筒屋、現栄本町)があり、はじめはその2階に、のちに隣の借家に住みました。田福のほか、酒造家の山川星府らを中心とした池田の旦那衆と、俳諧、蹴鞠など諸芸の会合をひらき、池田文化の発展に寄与しました。

呉春が創始したとされる「四条派」は、円山応挙の「円山派」とあわせて「円

山・四条派」と呼ばれます。円山・四条派は、自然の写生を重視し、身近で親しみ深い題材を平明で写実的な表現によつて描き、上方新興市民層の支持を得ました。

その特徴の一つに、《老松小禽図》にも見られる「付立て」と呼ばれる技法があります。輪郭線を用いず、墨や淡彩の微妙な濃淡によって、対象の形態感や立体感をやわらかく表現する技法です。この技法は、水墨画の技法としてそれ以前から存在していましたが、応挙によって技法的工夫が加えられ、円山・四条派の作品に広く用いられるようになりました。呉春は、この付立て表現を、筆墨の美を生かして、作品にとり入れています。



呉春《老松小禽図》

寛政8~13年(1796~1801)頃 京都国立博物館蔵

呉春の末弟・松村景文

寛政元年(1789)、呉春は再び京都に戻ると晩年まで定住し、「四条派」の礎を築いていきました。呉春には子がありませんでしたが、27歳年下の異母弟である、松村景文(1779~1843)をはじめとする師弟を教育しました。

景文は、花鳥画を得意とし、淡彩による穏和な作風で知られました。《花鳥図屏風》は、一扇ごとに絵を描いた紙を貼り付けて仕立てた「押絵貼屏風」の形式です。藤、牡丹、白梅、芙蓉、朝顔、薄、水仙などと小禽が描かれており、これらは四季を全て表しています。景文の作品にも「付立て」の技法が生かされていますが、呉春が水墨の筆触の味わいを残しているのに対して、淡彩の濃淡による平明な写実的表現となっています。

この屏風は、大阪市内の旧家に所蔵されていました。景文のあっさりとした瀟洒な作風は、生活空間を彩り私的な会合に華を添える、屏風本来の調度としての役割を果たしていたと考えられます。

また景文は優れた門人を多く輩出し、明治以降の大阪における日本画にも大きな影響を与えました。弟子の一人であった西山芳園は、大阪における四条派の代表的な画家であり、その系譜は

須磨対水など本展出品作家につながっています。

今日池田にのこる屏風の多くが円山・四条派の系譜にあることから、池田で最も愛された絵師が呉春であったといえるでしょう。呉春、景文をはじめ、さまざまな池田ゆかりの屏風をとおして、近世から近代にかけて花開いた文化の魅力をお楽しみいただけます。



松村景文《花鳥図屏風》

享和元~天保14年(1801~43)頃 大阪歴史博物館蔵

◆問い合わせは歴史民俗資料館
☎751・3019